



「汗だく」、美術鑑賞でん末記

教育委員会 石川美枝子

先日、マスコミや美術関係者の間で話題の展覧会「西洋の美術展」を見に上野公園の国立西洋美術館に出かけた。

その日は梅雨時だというのに、朝からもう、真夏並みの暑さで、上野駅に降り立つ人波を見た時から、相当の混雑ぶりが予感された。

三月下旬からの同美術館の超ロングランとなった展覧会も、あと数日を残すばかりとなったとはいえ、午前の開館時は、いまだ人の出足もそう多くはあるまいと高をくくっていたのが甘かった。強い日射しの照りつける中、公園入口にはもう人があ

ふれ、行列さえできています。入場門のすぐ傍でメガホン片手の男の人が「団体さんはこちらの入口から」とがなりたてている。恐る恐る館内に入っていくと、やはり展覧会場はあたかもバーゲンセールの如く人・人・人でごった返していた。紀元前五世紀の古代ギリシャの石像たちで始まる入口付近は、はるか海を隔てて、幾千年の歳月を経て、日本にやってきた見事な女神たちを、ひと目見ようとすると人々の人垣で、一分と立ち止まってはられない。

欧州評議会が特別企画し、「西洋の美術展」その空間表現の流れ」をテーマに構成された今回の展覧会は、紀元前五世紀の古代ギリシャから、中世の宗教美術、ルネッサンスを経て近代に至る二千五百年のヨーロッパ美術の流れを「空間」という概念で、人間がどのように美術作品をつくり上げ、表現に変えてきたのかをたどる壮大なスケールのものである。

ヨーロッパ有数の美術館から門外不出の名品を一堂に会したこの展覧会は、重要な美術作品

の陳列変えはできないというところで、東京一カ所のみで開催ということもあってか、七〇万人の観客動員を見込んだという主催者のキャンペーンも大々的なものであった。それ故、又とない好機を見逃してはならぬとおびたらしい人々が上野に馳せ参じた訳で、かく言う私もその一人であった。

しかし、あの混雑ぶりは、いささか常軌を逸していた。最初は一歩でも作品に近づこうとあがいていた私だが、だんだん妙に腹が立ってきた。これでは上野動物園のパンダ見物と何ら変わらぬではないか。美術展の成功の是非が相変わらず「入場者何万人」という尺度で語られる現状であり、大規模な展覧会である程、興行性が強く打ち出される。一日一万人以上の入場者を受け入れる会場で、果たしてどのような「美術鑑賞」ができるのであろうか。やはり、美術鑑賞は何よりも落ち着いた雰囲気の中で、作品と身近にふれあい、それぞれの感性で作品と対話し、充実感に浸れる環境が必要だ。大勢の人々が訪ずれる美

術館は結構なことではあるが、展覧会開催にあたり、きめ細かな対応も必要であると思う。例えば、既に欧米の美術館で行われているようだが、入場者の数を時間で調整するなり、団体受付日を設ける等の配慮が求められる。

汗だくになって、断片的に「流れ」を追って、私は無念の想いで、名品達に別れを告げ館を出た。すぐ近くの東京都美術館

△あとがき▽

毎日の生活のなかで、新しい発見をするということは、非常に楽しいことである。今まで分からないでいたことが、何かのひょうしに分かったときの嬉しさは、誰もが経験することである。

新しい発見は、どこにでもある。テレビや新聞などからは、膨大な量の情報が流れ出てきて、その場に居ながらにしてさえ、世界各地の出来事を知ることができる。しかしその一方で、社会の高度化・複雑化は、体験を通して学ぶという機会を減らしてきている。体験に基づ

館では、団体展を開催していたが、人かげもまばらでひっそりと静まりかえっていた。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一二〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。

く知識は、実際の生活の場において、役立つことが多いと思われるのである。社会の発達に伴い、多様な実物との体験がある博物館への期待は、今後益々大きくなっていくに違いない。

ところで今回いくつかの博物館を訪ねて歩いたことに、私にとっての新しい発見があった。古い化石がおいてある場所という印象が強かった博物館には、積極的に市民ニーズにこたえていこうとする新しい動きがあった。実は、今一番博物館に求められていることは、多くの市民との出会いなのかも知れない。

△伊藤▽